『人文学報』第110号（2017年７月）
（京都大学人文科学研究所）

［書　評］

# 思想と六八年・思想と現在

檜　垣　立　哉
（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

総勢一八名の論考からなる，あまりにも浩瀚な共著作である。主題は，おおよそ六八年という時代やそこでの主役たち（ドゥルーズとフーコー）を軸としながらも，彼らに対する（いわば対立しつつ後続する）バディウやランシエールをあつかうだけではなく，ルソーやマキァヴェッリと現代思想との連関を探るという古典への目配りもなされている。テーマとしては，政治と現代思想という主題のほかにも，資本主義や現代の精神医療の領域という大枠が設定され，地域的にもフランスを特権視しながら，イタリアの運動史，さらにはマルクスやベンヤミンなどドイツ語圏の論者にも触れられている。こうした姿勢は，一見すると，分散的なようにみえなくもないだろう。とはいえ，編者である市田良彦が冒頭論文でまとめているように，政治と現代思想との関連を根本的に再考するためには，事態の複雑さからみて，この手の分散は仕方がないようにおもわれる。

私にとって，この書物に含まれる考察すべてを論じることは，領域の広大さからみても，到底なしうることではない。一介の哲学研究者にとって，それはあまりに手にあまる作業である。それゆえ二〇一六年三月に京都大学・人文科学研究所でおこなわれた合評会での発言と重なることをお許しいただきつつ，哲学と思想という観点から，こうした試みがいかなる現在的な有効性をもつのか，あるいは逆に（こうした時代に哲学を研究するものとしての自己批判をも含めつつ）いかに有効性を失いつつあるのかについて，いささかのことを記させていただければと考える。

すでにのべたように，この書物がそなえている議論の射程や範囲は相当に広い。しかしそうでありながらも，そのポイントは，冒頭の市田論文から読みとれるように，けっしてたんに分散したものではない。強みでもあれば弱みにもなりうる，この書物の軸となるテーマは，まさに六八年という時代である。あらたな思考が産まれ批判され，一部は消え一部は現在にも継承されている。そのなかで，政治に深くかかわった者，かかわりの薄い者，巻きこまれた者，傍観者でしかありえなかった者などがいる。それらを通じ，政治と思想について考えなおすことが，この書物のおおきな論点になっている。

このことには，充分に理解できるものがある。現在，現代哲学をフランスを中心としつつ研究する際に，一九六〇年代という時代は，そこでの思想の多産性という点からみても特筆すべきものがあるからだ。それだけではない。この時代に台頭してきた論者たちは，フーコーであれ，ドゥルーズであれ，デリダであれ，さまざまな意味で「政治の季節」にたずさわっている（ただ市田による本書 ―― 以下の引用ページ数はすべて本書のものである ―― p. 18，注解四（二）にみられるように，デリダについては，問題含みながら，「倫理」派として意図的に外したということである）。その上でいえば、彼らはすべて六八年に何らかのかかわりをもつとともに，七〇年代以降には，ある種の立場変更を余儀なくされている。フーコーの思考は，六〇年代と七〇年の生政治の時代とでは，明らかな断絶線がひかれうる。ドゥルーズは，いわば遅れた政治との連関とでもいわ

んばかりに，七〇年代以降になってガタリとの共著という，成功か失敗かも推し量り難い試みに身を投じることになる。デリダは，その初期の論考から政治的な視点が内包されているとはいえ，六〇年代から七〇年代においては，あらゆる意味においてテクストの住人であり，正義論を携えて倫理的な方向から政治的側面に関与したのはのちになってのことである。また，より年長でありながら，彼らと折り重なりつつその名が語られるラカンも，この時代からおおきなインパクトをうけつつ，内的な思考も外的な精神分析運動もやはり変容させてしまう。彼らにとって六八年は，いかなる意味をもっていたのか。あるいは六八年を（その短き政治の季節を）通過したあとで，何故彼らが立場を変貌させざるをえなくなったのか，それと現代社会との連関とは何か，これらの問題は，いわばトゲのようにして，今を生きるわれわれに突き刺さってくるのである。

二〇一六年という時点において，六八年はもう少しで半世紀前の出来事になる。半世紀前，というのは「事件」が「歴史」になるということ，その現場にいた人間が証言者としても多くは実在しなくなることを意味する（「歴史」は「政治」ではない，という合評会での市田発言をうけながらも，しかしまさにここで議論になるのはやはり「歴史」なのではないかとおもう）。現代社会にとって語り難い出来事であり，なおかつ多くの嫌悪に充ちた視線が投げかけられもするこの時代を正しく「総括」しうる場面が目前に迫っている。個人的には，私にはそれは，二〇年ほど前に，まさに一世代上の連中がしきりと戦争責任を論じていたのとパラレルであるようにもおもえる。五〇年，というのは意味のある時間的単位なのである。

いわゆる左翼運動は，この時期を境におおきく変貌した。共産党を中心とした国家転覆による全世界革命というヴィジョン自身は，それ以前のソビエトの動向から疑念に付されていたとはいえ，六八年によって最終的に否定され，そこから分岐した数々の運動も泡沫のように消えていった。誰もが素朴にイデオロギーについて語ることはできなくなった。その後に待ちうけていたのは，巨大な消費社会であり，ソビエト連邦の崩壊であり，アメリカを中心とし，ユーロ圏と日本を確かなパートナーとするネオリベ的金融社会の出現であり，共産党のもとでの巨大資本主義国家中国の出現であり，第三世界と呼ばれた地域の新興化であり，現在につながるイスラム原理主義の台頭であり，巨大戦争には到らないが場所を一切問わない「テロ」の時代の幕開けである。もちろんこれらは，ばらばらの事例でもある。だが世界をシンプルに共産主義か自由主義か（ソ連かアメリカか），左か右か，あるいは資本主義国家か第三世界か（裕福な国か貧困な国か），北か南かという方向定位で語りうる場面は，小泉義之ものべるように（pp. 84–85）この年代を境に消滅してしまった。その意味では，六八年とそれをとりまく諸運動は，その「顕在的に」示された目的を達成できず，すでに巨大な失敗として終わっている。しかしながらそこに「潜在的に」含まれていたさまざまな萌芽は，現代社会のなかに強く根づいているといえるのである。このことをまずはとりだしておかなければならない。

六八年が成功したのか失敗したのかというのはあまりに素朴すぎる問いである。われわれはまずフーコーに即して，その軌跡をみることができるだろう。

上記の思想家のなかでフーコーは「表面的」にはもっとも闘争の人である。街頭にでて，一世代上のサルトルとデモ行進をする写真はわれわれにノスタルジーをすら感じさせる。しかしながらわれわれは，七〇年代以降のフーコーの転換をすでに知っている。それは脱政治化ではなく，より精緻化した「生政治」の思考への変貌であり，現代社会論への足掛かりをつけるものである。だがフーコーにおいて，生政治学の議論と重なりあいなが

ら展開される「統治性」の議論は，現代のネオリベ社会，テクノロジー社会に対し，辛辣な批判を含みつつも，逆説的ながら，一面ではそれに多大な貢献をなしているともいえる。ハーバードビジネススクールを訪れば，「リーダーであるもの，それは己自身のリーダーであることである，己こそを統治せよ！」といった類いの，どことなくフーコーをおもわせるスローガンを，いやというほどみることができる（私は，このネオリベの聖地にべたべた貼られているおおくのビジネス・エリート養成スローガンをみたときに，これは文化大革命のパロディにもおもえるなと，かなり真面目に感じた）。フーコーのテクノロジー的ネットワーク論や監視権力論そのものが，Google や Apple や Facebook などカリフォルニアの資本主義産業群を想起させないとことはありえないだろう。繰り返すがフーコーの議論は，これらに対する深刻な批判を含んでいる。彼が七〇年代以降の講義録で，リベラリズムと経済学の分析をなしていることは（とりわけ『生政治学の誕生』は，実質ネオリベラリズムの歴史的淵源を探るものである），現代のネオリベ金融主義者たちへの系譜学的な批判であることは明らかだろう。だが他方でフーコーは，ネオリベの隆盛を，ある意味では必然視していたようにもおもえる。八四年に死去した彼は，生政治学の議論がダイレクトにつながるバイオテクノロジーの進展をみることはできなかったし，それが重なりあう金融リベラリズムの徹底化をみることも無理であった。だが，フーコーはある種の予見とともに，すぐにこういう社会は訪れるのだろうということを，ある種の歴史的必然としてとらえていたのではないか。

加えてドゥルーズである。おそらくドゥルーズやドゥルーズ＝ガタリの政治性については，市田論文，とりわけバディウとのかかわり（市田論文，p. 36-　松本潤一郎論文，p. 528-）などで提起されている問題が重要であるだろう。「出来事性」をめぐる彼の思考が，はたして政治的なものであったのか，あるいは反政治性を反時代性とともにそなえていたのか，これについてはさまざまな見解がありうる。だが，少なくともフーコーに比していえば，出来事の反実現的性格をのべる彼の議論が，「表面的には」政治的でないことは明らかだろう。しかしそれは当然のことながら「潜在的に」，またある場面では明示的にも（「追伸――管理社会について」『記号と事件』所収などは，あまりに重視されすぎているようにおもえるが）政治への関連を含むし，しかもそれは，相当に込みいった議論の末にでてくるものである（小泉論文や長原豊論文が，ともに idiot という，いわば何もなしえないことにおいて際だつ主体を政治的思考の軸においていることは，この込みいり方をよく示している）。だが，ここでもあえてのべたいのは，むしろドゥルーズ＝ガタリ的な概念の，ネオリベとの近接性である。

いうまでもないがリゾームであれ，平滑空間であれ，逃走線であれ，それらがいかに政治批判的な論脈で語られようとも，まさにネオリベが存分に使い回しているタームにほかならない。ドゥルーズの議論が，とりわけアングロサクソン的世界で流通し，一方ではそれが（アングロサクソン化された）左翼言説の拠点になりつつも，他方，フーコーと同様に，ある種の建築論，都市設計論，ネットワーク社会論などに，すなわち高度情報資本主義社会にきわめて適合したものとして「利用」されている事実は無視できない。

市田はこのことについて以下のように記している。「ボルタンスキー＆シャペロの『資本主義の新たな精神』は……彼ら〔ドゥルーズとフーコー〕の受容を社会学的に見たときには，「リゾーム」も「多種多様性」もビジネスモデルとして現に役に立ってきた事実を説得的に明らかにしている……マネージメントの専門家こそ，ドゥルーズ＝ガタリを学者的にではなく実践的に，「政治的」にではなく「社会的」に読んだのである」（pp. 18-19）。「〔フーコーのガバナンス論と同様に〕ドゥ

ルーズ＝ガタリにしても，マネージメントに活用する以外に，インターネットそのものを彼らの「理論」を駆使して分析し，擁護する人々は世界を見渡せば後を絶たない」(pp. 19–20)。確かに市田はこれを「政治の退潮」のなかで「政治を見捨てた」現代思想の生き残り方として示している。私はそれに半ば同意しながらも，ネオリベ社会における奇妙な「現代思想」の残存は，たんなる社会学的観察事例や倫理問題というよりも，それ自身きわめて本質的な政治的争点でありうるとおもう。おそらくこうした生き残り方は，無下に否定することができるものではない。それは確かに，フーコーやドゥルーズ当人の意図とはかけ離れたものであるが，さりとて後期資本主義において，まさに二一世紀が十数年も過ぎた現在でも，「現代思想」としてのフーコー・ドゥルーズのタームが違和感なくうけいれられている奇怪さが問題なのである。この逆説の本質性を突き詰めるべきではないか。またこのことは，すでにのべたように，六八年を「折り返し地点」として，世界が著しく消費社会に舵をとった事実からみても，とりわけ重要であるとはいえないだろうか。

この点を論じているとそれだけで紙数がつきそうである。急ぎこれとは別の側面，つまり六八年の思想家たちによっては示されなかった現代的なテーマと六八年との，これもまた側面的なつながりについて若干のことをのべてみたい。

論者にとってとりわけ重要とおもわれたのは，イランをあつかっている布施哲論文と，ベンヤミンを論じた中山昭彦論文である。前者はフーコー後期における「政治的精神性／霊性」を主題とするものである。フーコーの七九年のイラン革命に対する，ある種の「口を滑らせた」感がある言説をひきあいにだし，それとの距離を測るかたちで考察が展開される。もちろん私はイスラムの現代史についても現在の原理主義的な趨勢にかんしても，一介の素人的な知見以上のものをもちあわせてはいない。またこうしたフーコーの言説が，ある種のオリエンタリズムを含むことはいうまでもない（フーコーの日本へ賞賛や，カリフォルニアへの賛美 ―― むろんそこにはゲイについての関心が中心であるのだが ―― もそうであるが，こうした点で，良くも悪くもフーコーは素朴である)。しかしながら，現在的な問題としての宗教原理主義と，この時代以降のフランス現代思想がどのようにかかわるのか，あるいは逆に，たいしたかかわりをもてないのかは，それ自身思考されるべき課題である。

この布施論文にも，ベンヤミンの名がほとんど通りすがりにあげられていること（p. 225）からもかいまみえるように，原理主義の問題は，現代政治において，ベンヤミンの問いと切り離すわけにはいかない。中山論文は，ベンヤミンとアガンベンを論じつつ，暴力と政治哲学の問いが，現代においてあらたな光のもとでとりあげられている事態をうけながら，多くの問題提起をおこなっている。中山論文では明示的に論じられることはないが，ベンヤミンは，現代フランス思想の論脈において，デリダの暴力論との深いつながりがあるとともに，とりわけ「認識批判的序説」における「モナド論」，「理念」としての「星座」論，そこでの「切断」や「断片」などの主題は，ドゥルーズを読む者にとって（直接の影響関係が「皆無」であることは自明であるとはいえ)，ドゥルーズの『差異と反復』の理念論，後年のライプニッツ論（これの政治性の問題については，まさに市田論文 p. 34–が触れていたものである）と，もちろん議論の方向性を異にするとはいえ，強いむすびつきを感じさせる。そこには，ベンヤミンとベルクソンの記憶論の関係 ―― ベンヤミンがベルクソンの記憶論に関心をもっていたことは事実である ―― や，ソレルの暴力論も視野にはいってくるのだが，この点は今は措かざるをえない。ただ，ベンヤミンを読むことと，その暴力論や歴史論の徹底した方向性とは，六八年の思想を越えて，現代の原理主義そのものが，ネオリベ資本主

義への対抗軸として拡がる事態をどう思考すべきかに結びつくものであり，こうしたテーマについてなお一層の考察の必要性を感じさせる。

さて，以上の総覧ののちに，もうひとつ主題とせざるをえないことがある。それはラカンや精神分析と政治の関係である。

これについては，ナドーの『アンチ・オイディプス草稿』を分析し，ドゥルーズにおけるガタリの役割とそこでの政治性の介入についての検討をおこなった佐藤嘉幸論文，反精神医学運動とフランス思想の関連を俯瞰的にあつかった上尾真道論文，そしてまさにラカンその人と軌跡を六八年という出来事を軸にあつかった立木康介論文が採録されており，それぞれ裨益されるところが多かった。とりわけフーコーの記述と反精神医学との関連についての上尾の提起（p. 559-）や，立木論文での，フーコーとラカンの，六八年の構造主義を巡るある種のやりとりについての記述（p. 599）は，多くのことを考えさせられた。ただし精神分析と政治という議論をたてるならば，ラカン派や精神分析の展開が，現状のカウンセリングやケアの文化の隆盛（これはまさに，フーコー的な牧人司祭権力の現代版にほかならない）にどうかかわるのか，つまりはアクチュアルな事態への展望をどう描けるのかについての示唆が今ひとつほしかったようにおもえる。ないものねだりにすぎないのかもしれないが，現在における精神医学的な政治の係争点が，むしろケアや介護，カウンセリングが含む「権力性」の問いに速やかに移行していることは，やはり論点になりうるとおもうからである。

まだまだ論じるべきことはたくさんある。ドゥルーズやドゥルーズ＝ガタリにかんしては，小泉論文の国家論について，長原論文について，松本論文でのバディウの議論との対比について，それぞれがさまざまな論点を含むことをここで具体的に検討しえなかったことはお許しいただきたい。この書物にまとめられた膨大な研究成果が，今後ともひき継がれる場があればと期待するばかりである。

最後に，直接この書物に関係してはいないが，六八年と政治というテーマについて，市田が冒頭の注解（pp. 32-33）でもとりあげている西川長夫の『パリ五月革命試論　転換点としての 68 年』平凡社新書，は暗に陽にこの書物に，あたかも分身のように寄り添っているようにおもわれたことも記しておく。西川長夫の論考は，はるかに現場の「事件性」に密着したものであるが，この論集が六八年を思想の側からとらえなおすものであるかぎり，西川論考とのクロスは，読解の上で不可欠であるようにもおもわれた。この点，締めの言葉としてのべておきたい。